



死者の沼



朝陽遥

広大な砂漠地帯を北に抜けて、街道沿いに半月ばかりも歩けば、それまでの荒涼たる風景とは打って変わって、緑あふれる湖沼地帯が姿をあらわす。

大陸南岸に広がる灼熱の海からはいささか距離があるのだが、それにもかかわらず彼の地が豊かな水に恵まれているのは、雲の生まれるところ（オブラク・ノイ・ロジェナ）と呼ばれる山嶺を、北に臨んでいるためだ。

山肌にぶつかる風から絶え間なく吹き散らされても、雲は尽きることなど知らぬげに湧きいでて、湖沼地帯へと雨をもたらす。砂漠を通過してこの地域にたどり着いた旅人ははじめ、その豊富な水量に圧倒され、惜しげもなく水を使うことのできるこの地方を、何と恵まれた土地かと思うものだ。だがそんな感動も最初のうちだけのことで、長く留まれば、いずれは水が多すぎるがゆえの苦勞を、いやでも骨身に染みて理解することになる。

風はのぼせ上がるような湿り気をはらんで重く、人や獣の息をふさぐように押し包む。ものが腐りやすく、すぐに虫が湧く。そのせいでひとたび怪我をすれば治りは遅く、傷が腐って手足を落とすものも少なくない。

虫や草花にはやたらに毒のあるものが多く、散在する湖沼の中には、水そのものが毒気を帯びている場所さえある。水気の多い土はやわらかく、すぐに崩れ、住処を構えるのに向く土地は、広大なこの一帯のうちでも、ほんの片隅の一部にすぎない。

だが、そうした人の世の都合をひとまず脇に置き、ただ無心に眺めるならば、湿地帯の景観は美しい。

湖畔に広がる葦原が風に波打ち、水上には淡い色合いをした花々が咲き乱れ、水鳥たちが優美に首を曲げている。その隙間からのぞく水面には、高く澄んだ空が映り込んで、立ち止まってふと見入れば、天地の境が不確かに思えてくる。

その美しい湿地帯の中ほどに、死んだ者と言葉を交わすことのできるという沼がある。

死者のゆく先についての人々の言い伝えは、地方によってさまざまだ。天高く上った先にある星々の世界だという土地もあれば、地の底深くの暗闇の国だと言い伝える部族もある。海のはるか向こうだとか、あの山を越えた先だとか、ところによってまるで違った話が出てくるものだが、それでもたいていの場合、人の足ではとうていたどり着くことのできないはるか彼方の場所を、死者の安息の地と捉える向きがあるようだ。

それがこの湖沼地帯の人々にかぎっては、死者の声を聞きたいのならば、あの湿原にあるどこそこの沼へゆけと、指さして言う。初めて聞いたときには、ずいぶんと手近な冥界への入り口もあったものだ、いささか呆れたものだ。

その話を真に受けたというわけでもなかったが、私は死者の沼を、訪ねてみることにした。ひとつには、変わった風物のことを耳に挟めばこの目で確かめてみたくなる、持ち前の好奇心のためでもあったし、何より本当に死者と言葉を交わすことができるのならば、私には、話をしたい相手があった。

見知らぬ土地で人里離れた場所を歩き回ろうとするのならば、案内人は欠かせない。死者の沼にいたるその道は、最寄りの町からたいした距離があるわけではなかったが、なにせ湿地のまっただ中のことで、大小様々の池や沼の隙間を縫うようにして歩かねばならなかった。街道を旅するときのような、わかりやすい道標があるわけでもない。

それで私は現地の男に、道案内を頼むことにした。このあたりの人々が皆そうであるように、くせのある黒い髪と、がっしりとした小柄な体躯を持つ、中年の男だった。人好きのする笑顔を浮かべてよく喋り、十歩ごとに冗談を飛ばしてこちらをからかってくる。

町を出てたいして歩きもしないうちから、道はすぐに、歩くのにも苦勞するような泥濘（ぬかるみ）になった。ところどころに地を低く這うような灌木や草が繁り、その張り巡らされた根の上を踏んで歩けば、ともかく泥に沈まずにはすんだが、その代わりに何度も足を取られてつまづいた。

湖沼地帯の天候は変わりやすい。その日も町を出たときには晴れ間がのぞいていたというのに、歩くうちに細かな雨が降り始め、気がつけば空の低いところを一面に覆うように、重苦しい雲が垂れ込めていた。ただでさえ悪い足場がますます滑り、視界はおぼろげに霞んで、油断すれば連れの背中も見失いそうだった。もっとも、これくらいの雨は雨のうちにも入らないと、案内人は笑ってみせたのだったが。

かそけき雨の音が地面を打つのに混じって、水辺で何かが跳ねる音や、鳥たちの羽をふるって水気を切る音が、どこか一枚布を越しているかのように、遠く響いていた。

足元の悪さについては噂に聞いていたので、蟬引きをした靴をしつらえていたのだが、その程度では気休めにもならず、歩くごとに生ぬるい泥水が、容赦なく足指のあいだまで染みいつてくる。比べて案内人の足元はといえば、ほとんど素足と大差ないような頼りない草鞋で、しかしそのほうがかえって手間が少ないのかもしれない。

いっそ彼に習って、私も裸足になろうかとも考えたのだが、湿地にはしばしば蛇や毒のある虫がいると聞かされていたので、踏ん切りがつかなかった。とはいえ湿地帯に入ってからこの半月ばかりで、すでに手だの首だの何度となく虫に食われていて、いまさら足元だけを庇ったところで、どれほどの意味があるかは疑わしかったのだが。

さして歩かぬうちに、案内人は唐突に足を止めて、犬かなにかのようにぶるぶると雨粒を振り飛ばすと、前方を指さした。

――着いたぞ。

目の前に広がる光景を見て、正直なところ、私は拍子抜けした。死者の沼というくらいだから、よほどおどろおどろしい光景が広がっているのかと思いきや、そこは緑あふれる水辺だった。

深い緑色をした水面を、奇妙な形をした浮き草が覆っている。そのせいで、どこまでが岸でどこからが水上なのか見ただけでは判りづらいが、沼と呼ぶか池と呼ぶか、ちょうど迷うくらいの水量だった。浮き草はところどころに白い花を咲かせ、そのせいか、かすかに甘いような匂いがする。向こう側の岸辺には青みがかった大きな鳥が、彫像のように佇んでいた。

――美しいものだな。

思わず呟いて、引き寄せられるように沼に近づいたとたん、足を滑らせた。

泥に、靴底がのめりこんだと思うが早いか、私は体勢を崩して尻をついた。見れば地面だと思っていた場所は、浮き草のみっしりと繁茂する、沼の縁だった。

それでも跳ね上げた泥で顔を汚したそのときには、まだ驚きと、幼い子供のようにすっ転んだことへの気恥ずかしさのほうが、焦りよりも勝っていたのだ。だが立ち上がろうとして体重を掛けた足が、思いがけず深くまで沈みこんだ。

――落ち着け。むやみにもがいてはならない。

案内人の鋭い声音に、慌てて動きを止めた。じっとしているあいだにも、少しずつ体が沈み込んでいくような気がする。いや、それは錯覚ではなかった。左足は臍から下が、すっかり泥に埋もれている。それを引き上げようとして、右足に力を込めようとする、反動でかえって体が沈む。

――そこの草を、つかむんだ。そう、葉の丸いほうではなく、蔓の絡み合っているほう、そう、それだ。

言いながら、案内人は足場を確かめて、慎重に近づいてきた。ようようその手に引き上げられながら、振り返ってぞっとした。沼は何食わぬ顔で元通りに静まりかえっていた。

――もう大丈夫だな。その蔓を覚えて、目印にするといい。それがあるところは、だいたい地面だから。

そう言って、案内人が手を離れたときには、私はすっかり泥まみれだった。案内人もまた、私のはね飛ばした泥に頬を汚して、けれど気を悪くしたようすもなく、朗らかに笑って見せた。

――済んだら、呼んでくれ。向こうにいるから。

案内人は手振りで方向を示すと、背を向けて、さっさと歩いて行った。

それは前もって決めておいた手はずだった。死者との対話を果たすためには、ひとりきりでなければならないのだという。

姿が見えなくなる直前、思い出したように、声が追いかけてきた。

――このあたりの泥は、深い。足元にはくれぐれも、気をつけろ。

わかった、と答えながら、自分の声が霧雨に吸い取られていくような錯覚を覚えて、私はひとつ、身震いをした。

連れの姿がすっかり見えなくなると、私はようやく踏ん切りをつけて、沼のほうに向き直った。今度こそ慎重に足元をさぐって、蔓の絡まり合っているところを踏みしめる。それから、そっと、弟の名を呼んだ。

早くに死なせた弟のことを、私は長年、悔やみつづけていた。死者に向かって詫びたところで、何もかもが今さらにすぎることはわかっていたのだが、一言でも言葉を聞くことができれば、あるいは面と向かって詫びることが出来るならば、自分の中で、何かしらの踏ん切りがつけられるのではないかと思ったのだ。

己の声がかすかに反響するような気配がしたが、返事らしい声は聞こえない。耳を澄ませていつとき待ったが、遠くで鳥が寂しげに鳴いているばかりだった。

やはり冥界に繋がる沼などというのは、ただの迷信だったのだろうか。あるいは、弟の魂の眠る故郷とこの沼が、あまりに離れすぎていて、私の声が届かないのか。

いや――かすかに、何か音がする。そう思って水面に目を凝らした。魚影は見えなかったが、その代わりに、沼の表面でぶくぶくと泡のはじけるのが見えた。

藻に覆われてしかとは見通せない水面の下に、何か大きな生きものが潜んでいるのかとはじめは思った。だが、じっと息を詰めて見ていると、どうやらそういうことではないようだった。それにしても泡の出る位置は動かなさすぎたし、その間隔は一定にすぎた。ここではなくもっと東の火山地帯で聞いた話だが、水底の泥から、空気が湧き出しつづける場所があるという。何かそういうものと同類の、生きたものの仕業ではないことがらのように思われた。

こうした物音や、あるいは鳥の声か何かを、死者の声と聞き違えた人々がいたのかもしれない。それが噂話として交わされるうちに、誇張されて伝承となったのではないか。そんなふうには推測してはみたものの、なかなかふっきることができず、迷い迷い、今度は少し声を張り上げて、もう一度弟の名を呼んだ。

ふいに風が吹き付けて、雲が大きく流される。いつの間にか雨は止んでいたが、その代わりのように、風によって吹き倒される葦が、雨のような音を立てた。

返事はついに、帰ってこなかった。

――死者の声は、聞いたのか。

合図に答えて戻ってきた案内人は、さっきまでの陽気さをどこかに置き忘れてきたような神妙な表情で、そう訊ねてきた。

――いや。残念ながら。

私が首を振ると、男はわずかに目を細めて、

――そうか。そりゃあよかった。

そんなことを言った。目的を果たせなかった相手に向かってかける言葉としては、それはおかしなものだったが、男の表情に皮肉の色はなく、むしろ声の調子には、どこかほっとしたような響きさえあった。

――よかった、のだろうか。

私はほとんど独り言のように呟いた。返事を期待したわけでもなかったのだが、案内人は小さく肩を揺すって、真面目な顔でうなずいた。

――そう思うよ。

道中はうるさいほどよく喋った男が、このときだけは言葉少なにそう言ったきり、黙りこんだ。

もとより死者の声を聞けると、頭から信じていたわけでもなかった。そう考えて自分を慰める一方で、同じ頭の反対の隅では、何が足りなかったのだろう、何の条件が揃っていれば成功した

のだろうと、そんなことばかり考えていた。

黙りこんでいたのはほんのいつきのことで、いくら歩かないうちに案内人はもとの饒舌を取り戻したのだが、私は彼の軽口を、途中からほとんど聞いていなかった。物思いにふけていたせいではない。しだいに意識が朦朧としてきたのだ。

霧の中の、単調な道行きのせいだろう、あるいは雨に打たれたのが悪かったのかもしれないと、霞む思考の中で、そんなことを考えた。疲労でぼうっとしているのだと。

これは異常だと気がついたのは、帰路も半ば以上を過ぎてからだった。小川を渡り終えて、体勢を崩しかけ、近くに生えていた低木の枝を掴んだ瞬間、急激に息が苦しくなった。

間髪入れず、強烈な悪寒に苛まれた。視界が揺れて、足がふらつく。震えるほど寒いのに関わらず、肺腑のあたりだけが、異様に熱い。連れに助けを求めようとした声が、その熱に灼かれて掠れた。

そのせいで案内人はひとりで喋りながら、ずいぶん先に進んで、それからようやく私がついてきていないことに気がついたようだった。彼が振り返り、驚いて引き返してくる気配を遠くに感じながら、私は冷たい泥のなかに倒れ込んだ。

つぎに気がついたときには見覚えのない部屋で、寝台の上に寝かされていた。

このあたりの地方に独特の、やたらに背の低い寝台だ。土台になる木の脚に、乾燥した植物の蔓が編み込まれていて、苦いようなにおいがする。体の上にかけていた織り目の粗い布は、ずいぶんくたびれてはいたものの、ともあれ清潔そうではあった。

状況が分からず、困惑したまま瞬きをすると、汗が目に入って痛みがはしった。髪の中までぐっしょりと濡れ、手足がいやに冷えている。

部屋には誰もいなかったが、壁越しに、誰かのくぐもった話し声が聞こえていた。

窓から射し込む光の角度からすれば、まだ日が高いのだろうと思われた。倒れる前のことをおぼろげに思い出しながら、掌で顔を擦ると、やけに粘りけのあるいやな汗を搔いていた。

誰の家だか知らないが、案内人がここまで背負ってきてくれたのか、あるいは人を呼びに走ってくれたのか。あれからどれくらいの時間が経ったのだろう。

状況のわからないまま、軋む体を引きずるようにして、どうにか寝台から降りると、体重を支え損ねた膝がぐくだけで、ほとんど倒れ込むように床に落ちた。

その物音を聞きつけたのだろう、話し声がやんで、足音が近づいてきたとき、私はまだ情けなく床にへたり込んだままだった。

——目を覚ましたか。

入ってきたのは浅黒い肌をした、見知らぬ男だった。このあたりの出ではないと、ひと目見てわかる容貌をしている。肌の色や顔立ちもそうだが、体つきからして、まるで違う。もっと南の、砂漠地帯に暮らす民族のように見えた。

男は私の体を支えて寝台に押し上げると、低い声で、まだ起き出すのは無理だというようなことを言った。その言葉は、このあたりの地方で広く使われているものだったが、抑揚にはやはり、南方の訛りがあった。

——あなたが助けてくれたのか。あなたは医師か。

——まあ、そんなようなものだ。

男は応えながら、熱だか脈だかを確かめるように、私の手首と喉に触れてから、納得したようにうなずいた。

——経過はいいようだ。

言って、男は首を傾げた。

——湿地で、虫に食われなかったか。

——食われた。

——それだろう。

虫が運ぶ風土病があるのだと、男は言葉少なに説明した。そうといって、無防備に湿地帯に踏み入った私の浅はかさを責めるでもなく、

——このあたりでは、皆たいてい子供のうちに済ませてしまう病だが。大人になってから罹

ると、篤くなる。

そんなことを言いながら、扉から出て行った。そのまま放っておかれるのかと思いきや、男は手に椀を持って、すぐに戻ってきた。やはり無言のまま、椀に入った薬湯らしきものをつきつけてくる。ぶっきらぼうというか、ぞんざいな仕草だった。

その椀を、受けとっていいものか、私は逡巡した。

――実は持ち合わせが、それほどないのだが。

気兼ねしながらそう申し出ると、男は片眉をあげたが、無言のままこちらの手に椀を押し付けてきた。それでも私がまだ迷っていると、

――お前が、代金を払えないから飲まないと言ったところで、もう煎じた薬を捨てる以外に、俺にどうしようがある？

仏頂面のままそんなことを言った。いわれてみればそれももったもな話なのだが、それでもまだ私がためらっていると、小さく肩を揺すって、

――どのみちたいした薬でもない。もとはといえば、その辺の沼地に生えている草だ。

そんなふうに、商売けのないことを言った。

もらった薬湯を飲んで一眠りすると、起きたときには熱はもう、ほとんど下がっていた。男は言葉少なに指示を出し、着替えをよこし、麦の粥を食わせてくれた。薄い塩味のする粥には、何か草のようなものが入っていて、苦いような渋いような、なんともいえないにおいをさせていたが、食べていっときすると嘘のように気分がよくなったから、それも薬の類だったのだろう。

そうする合間にも、男の家には途切れず誰かが駆け込んでくる。やれ、子供が転んで腕を切ったの、もう何日も腹を下しているだの、頭が割れるように痛いのと、向こうの部屋から頻々に呼ばれる声がして、そのたびに男はせわしなく出て行った。

ずいぶんと忙しそうなお男から、それでも合間合間に聞き出した話からすると、やはり私をここまで連れてきてくれたのは、あの陽気な案内人らしかった。

その当人はといえば、私が目を覚ました次の日の午後遅く、不意に訪ねてきて、

――ああ、すっかりいいようだ。さすがはエトウキだ。

そんなふうに笑った。エトウキというのは、医師のことを指しているらしかったが、どうも彼の名前ではなく、何か、尊称のようなものようだった。

おかげで命拾いをしたと、礼を言うと、案内人は前歯の欠けた歯を見せて笑い、

――何、案内料の半金を、受け取れなくなったら困るからな。

そう手を差し出してきた。その現金な態度に思わず苦笑したものの、しかし彼がその気になれば、わざわざ私をあんな場所から担いで医者のところまで駆け込まなくても、財布だけを盗って捨てに行けばよかったようなものだから、その言い分は、照れ隠しと受け取るべきだろう。あんな足場の悪い場所で、大の男ひとり担いで歩くのは、並たいていの苦勞ではなかったはずだ。

――エトウキというのは、偉い人なのか。

半金を数えて手渡ししながら訊ねると、男は真剣そのものの顔になって、何度もうなずいた。

——大変、立派な人物だ。この町に彼のようなエトウキが居て、あんたは幸運だった。

そのようだ、もらった薬がよく効いたという話をすると、案内人は自分が誉められたかのように目を輝かせて、

——そうだろう、そうだろう。よく診てもらえ。

そんなふうにな度も顔してみせた。

熱も下がったからには、あるだけでも礼金を置いて、早々に暇乞いをするべきだろうと思ったのだが、私がそのことを切り出すと、医師は首を振って

——病を、甘く見るものではない。

思いもかけず厳しい口調で、そう言った。少なくとも熱が下がって七日は、様子を見なくてはならないと。それで、代金を気にしているのなら払えるだけでかまわないという言葉に、つい甘えた。

この小さな診療所にやってくるのは、誰も彼も、懐に余裕のあるとはとても思えない人々ばかりで、見れば代金を満足においてゆけないのは、どうやら私ばかりではないようだった。金の代わりに卵だの、その辺の沼地で採れたのだろう芋だの菜っ葉だのと、せめてもの気持ち以上の何でも無いような、雑多な礼の品ばかりが、診療所の片隅に積み上がっていく。そうした品々さえ持ってこれない連中や、あるいは近所の人々が、代わる代わる顔を出して、医師の食事を作ったり、洗濯を手伝ったりしているらしかった。

私に飲ませた薬湯を、たいして高い薬ではないと言ったのは、どうやらあながち気を遣わせないための方便だったわけでもないらしく、本当に裸足の子供らが、ときどき泥だらけで駆け込んできては、まさしくいまその沼地で集めてきたというような、怪しげな草の根やら虫やら蜂の巣やらと、薬の材料らしいものを置いてゆく。医師はそれをいちいち検分して、次はできれば何をとってきてくれだの、この花を持ってくるときは根を切るなだのと、子供らに向かって大まじめに教えている。

診療所にもあまりにも頻々に人がやってくるものだから、このあたりにほかに医師はいないのかと聞いてみたところ、

——いることにはいるが。

そんなふうにな、齒切れの悪い返事が返ってきた。

——エトウキの家系の男が、東側のはずれに一人住んではいるのだが、大して何を教わるでもないうちから、先代を亡くしてしまっただらしくてな。見よう見まねで適当なことをしているものだから、治ったり治らなかつたりするようだ。

そんなことを、憤るようになでも蔑むようになでもなく、淡々と語る。不思議な男だと思った。

まともに代金も置いて行けぬような貧しい人々を、毎日せっせと診てやっているくらいだから、おそらくは情に厚い人物なのだらうし、面倒見のいいことには間違いがないはずなのだが、それにしては感情的になることもなく、しじゅうただ黙々と、やるべきことだけをやっているように見えた。

聞けば最初の印象通り、南の出だと言って、彼は砂漠地帯の中ほどにある、大きなオアシスの名前をあげた。私も立ち寄ったことがある、街道沿いの大きな交易都市だった。各地の知識や文化の混じり合う拓けた街で、優れた医術のわざを持つ者も多い。彼の医師としての腕や知識は、そこで培ったものなのだろう。

――こちらに来て、もう随分になるが、ここいらの風習には、未だに戸惑うこともある。

そんなことを、やはり困ったふうには聞こえない淡々とした口調で言うのだが、それ以上の詳しい話はしようとしな。口数が少ないというより、言葉の足りない男だった。聞かれたことには答えるし、治療に必要なことは喋るのだが、己の身の上について語るのに、慣れていないのかもしれない。

起きられるようになると、私も足りない代金の代わりにせめてと、細々としたことを手伝うことにした。

医師の指示に従って、薬のもとになるらしい草だの虫だのを干したり磨り潰したり、包帯を洗ったりする。その合間に、同じように手伝いに来た近所のおかみさん連中と、よく世間話をした。医師はずいぶん彼らに信頼を受けているようで、ただ単に借りがあって頭が上がらないという以上に、尊敬されているように見受けられた。

だがそれは同時に、親しまれ愛されているというよりは、畏れられているようにも見えた。それは、彼がよその土地からやってきた人間だからということもあったかもしれないが、それ以上に、彼の生業のためだっただろう。というのも医師が、患者に向かって指示を出すときの物言いは、しばしば脅しめいた文句が混じるのだった。

――きちんと洗って、傷がふさがるまで包帯で覆っていなくては、傷口から悪い霊が入り込んで、足を腐らせる。

――誰か、おそらくはおまえの母方の血に連なる遠い祖霊が、古い恨みを引きずって、悪さをしているようだ。この薬湯には悪い念をしりぞける力があるから、必ず日に一度、煎じて飲むように。

つまるところ、エトゥキというのは医者というよりも、呪医のたぐいなのだろう。人々はかしこまって彼の言葉を聞き、何か言われるたびに、いちいち神妙にうなずいていた。ひとけが絶えたときに何気ないふうを装って、

――あの、祖先の霊がどうたらというのは、ほんとうのことか。

そう訊いてみれば、医師は困ったように、小さく肩をすくめた。

――ここらの人間は、ああした言い方をせねば、なかなか言うことを聞いてくれんのだ。

その口調はやはり淡々としたものだったが、それでも彼の苦労は、十分に察しがついた。

代わる代わる人々の押しかけてくる日中と違って、日が暮ればとたんに医院は静まりかえる。掃除だの洗濯だのと言った細々した用事は大概、昼間に近所のおかみさんが済ませてしまっているものだから、その日最後の患者が帰ってしまえば、あとは質素な食事を摂って、庭で水でも浴びるくらいしかすることがない。

医師は酒を飲むでもなく、このあたりの連中が男も女もよく吸うような、葎（たばこ）もやらないようだった。することがなくなれば、ただ椅子に掛けて、何か考えに耽り、じっとしている。何が楽しくて生きているのかと言いたくなるほど、つましい暮らしを、医師は送っていた。

こちらから話しかけなければ、治療に必要なないかぎりいつまでも黙っているような、言葉の少ない男だったが、それでも何日も泊まるうちに、多少は話もした。気まぐれに私のほうが話しかけて、それに彼がぼつぼつと答えるのが常だったが。

私はちょうど、このあたりの地方に来る前に、砂漠地帯を通過してきたところだったから、泊めてもらっている引け目から、半ば世辞のつもりで旅路で見た星空について話を振ると、

——そうだな。郷里に未練など、何もないようなつもりでいたが……

そこで言葉を切って、医師は窓から外を見上げた。

——砂漠の星空よりも美しいものを目にするには、なかろうなとは思う。

三日目の夜ふけ、ふと浅い眠りから覚めた私は、家の外で足音がしていることに気がついた。不規則な、どこかおぼつかないような足取りで、診療所に近づいてくる。

こんな時間に急患だろうか、怪訝に思いながら耳を澄ませていると、戸の開く音がした。そのまま足音は廊下を通り、医師が寝室に使っているもうひとつの部屋に消えたようだった。

何かかと思いはしたものの、何か切迫したような騒ぎの気配があったわけでもなかったから、起き出してわざわざ問いただすのも気がひけて、そのまま寝直してしまった。私が眠っていて気がつかないうちに、医師が急患でも診に行き、ちょうど帰ってきたところかもしれないなどと、頭の隅で考えながら。

驚いたのは翌朝になってからだった。診療所の床に、点々と泥だらけの足跡がついている。

起きてきた医師の足元を見れば、やはりべっとりと泥がこびりついていて、雨も降っていないのに、いったいどこをさまよい歩けばこんなふうになるというのか。

何があったのだと問いただしても、医師は首をかしげて、覚えていないという。その声音もやはり淡々としていて、自分でも驚いているというような調子ではなかった。初めてのことでないのだ。

——どうやら、夢歩きをするくせがあるようなのだ。

他人事のような口調で、医師は言った。それも一度や二度ではなく、ずいぶん前からのことなのだ。

医師はたいして気にしてもいないという具合に語ったが、それは、私には、ずいぶんと薄気味の悪いことのように思えた。自分が知らない間にさまよい出て、どこで何をして帰ってきたのかわからないというのは。

——夢歩きというのは、治せないのか。ほかの病のように、薬かなにかで。

——さて、どうだろうか。

本当に心あたりがないのか、それとも治したいという気がはじめからないのか、医師はいかにも気のないふうになぞ首をかしげただけだった。

当初の心づもりの七日が過ぎても、私はまだ診療所の世話になっていた。

——路銀が心許ないのだろう。どうせ部屋なら余っている。

医師がそう言ってくれるのに、一度は遠慮してみせたのだが、

——このあたりで宿と言っても、酒場の二階しかないだろう。あそこは暴利をとる。

そう言われて、結局は好意に甘えることにした。医師が名指して言ったのは、まさしく私が死者の沼に向かう前に三日ばかり泊まっていた、酒場を兼ねた小さな民宿のことで、たしかに宿というのも馬鹿らしいようなものだった。虱の出る天井裏の雑魚寝で、相場の倍ほどの値段を取る。

なにせ小さな町のことで、訪れる者自体が、そう多くはないのだ。ほかに宿らしい宿がなく、猟師が副業でやっているという唯一の酒場が、宿泊客から割高な料金を取るのも、まあ仕方の無いことではあった。

死者の沼を訪ねるという目的は果たしたのだから、さっさと出立するのもひとつの道ではあったのだが、それでもあえて留まることにしたのは、理由があった。十日ばかり待てば、この町で市（バザール）が立つという話を聞きつけたのだ。

各地を旅して回るには、少なからず路銀がいる。土地柄によっては、それこそ遠い異国の話のひとつでも語って聞かせれば、気前よく宿や食べものを振る舞ってもらえるようなこともあるが、当然ながら、そんなふう到手放しに旅人を歓迎してくれる土地ばかりではない。日払いの仕事にでもうまくありつければいいが、よそものを簡単に雇ってくれる仕事が、いつでもあるというわけでもない。それだから旅をして回る先々で、ちょっと珍しいような品を、安く仕入れておくのを習慣にしている。

もちろん旅の邪魔にならないような、かさばらない品に限られてはくるのだが、その土地では安くで売られているような、たとえば宝石の屑石だったり、書物や細工物などというような品を仕入れておくと、よその土地では物珍しさから喜ばれて、運が良ければ高値で売れたりする。

このときも、砂漠地方で手に入れた魔除け石や、高原地帯の植物の種など、少しは人の気を引きそうな品がいくらか手元にあったものだから、うまくすれば市でそれらを売って、治療代のいくばくかでも、医師に渡すことができるかもしれないと考えたのだった。

何も日を待たずとも、売りつける相手を探せないわけでもないが、酒場に来るのはたいていわずかな現金収入を酒につぎこむような連中だし、何より市の活気のただ中にいる人間のほうが、財布の紐も緩むというものだ。

そういうわけで、しばらく泊めてもらうことにはなったのだが、そうと決めた端から数日ばかり、患者に寝台を明け渡すことになった。

雨の篠つく夕暮れ時、真っ青な顔をして診療所に駆け込んできたのは、まだ大人の胸ほどまで

の背丈もない、小柄な少年だった。背中には弟だろう、よく似た顔立ちの小さな男の子を負って、焦りにもつれる舌で、医師に助けを求めた。

少年が状況を説明するあいだにも、血のしずくがぼたぼたと落ちて、診療所の床に染みを作った。医師は少年の背中から怪我人を下ろして、けわしく眉を寄せながら、脚の傷をあらためた。怪我人はまだようやく自分で歩けるようになったばかりといった、ほんの幼子だった。傷が痛むのか兄の剣幕につられて不安になっているのか、火がついたように泣いている。

駆け込んできた少年の言うことには、彼にかまってほしくてあとを追いかけてきた弟が、足をもつれさせて転んだということだった。そこに折悪しく、不注意な誰かの手によって、刃の錆びた鉞が放置されていた。

彼らの親を呼んでくるように、医師は少年にいつけた。それから泣き叫ぶ子供を押さえて傷を繰り返し洗い、無残な傷口を縫い合わせると、薬を塗った。傷口はそのときにはすでに、見てわかるほど腫れはじめていた。

嫌がる子供を、どうにかなだめすかして薬湯を飲ませおえたころになって、ようやくその両親が駆け込んできた。彼らはうろたえて医師に詰め寄り、ほとんど半狂乱のていで、どうか私たちの小さな息子を死なせないでくださいと、何度も繰り返した。

その彼らに向かって医師は、熱を出すかもしれないからと告げ、様子を見るためにここにこの子を泊めると説明した。かくいうわけで、私は患者とそのつきそいのために客間を明け渡し、その晩からしばらくは、診療所の床で毛布にくるまって眠ることになった。

そのささやかな客間に、両親ばかりか祖母だの叔母だのと、どうやら患者の家族が全員で押しかけてきて、ひっきりなしにすすり泣いたり、癩癩を起こして怒鳴ったり、慰めあおうとして失敗したりしていた。

果たして医師の宣言したとおり、熱は出た。子供は眠ってはうなされ、目を覚ましては心細げに泣き出して、母親や兄を呼んだ。動転した彼の母親は、そのたびにつられて泣き出し、恐慌をきたした。彼らを宥めるのに苦労しながら、医師は男の子の熱を測り、着替えさせ、私に手伝わせて薬湯を作った。

その大騒ぎのさなか、少年は、最初に弟を背負ってきたとき以来、ずっと黙りこくっていた。医師が気遣うように声を掛けても、両親からどうしてもっとよく弟を見ていなかったのかと責められても、意固地になったように口をきかず、膝を抱えたまま、弟の寝かされている寝台の、脚のあたりをじっとにらみつけていた。

三日目の昼前になって、ようやく患者の熱は下がった。床の上でうつらうつらしていた彼の兄は、はっと飛び起きたかと思うと、静かに眠っている弟の顔をのぞき込んで、おそろおそろその呼吸を確かめた。

――おそらくは、もう大丈夫だろう。

医師がそう口にしたとたん、それまでの意固地な態度が嘘のように、少年はいきなり声を張り上げて、泣きだした。

張り詰めていたものが切れたのだろう。少年はなかなか泣き止まず、それまで何度も彼をなじっていた両親のほうが、ばつの悪い表情をして顔を見合わせる始末だった。眠っていた子供は、

兄の泣き声に驚いて目を覚まし、つられて泣きだした。その様子を見て、周りの大人たちが笑った。

――錆びた金物の傷は、悪い霊を呼びよせる。そうしたものが体の中に入り込んで、あとになって悪さをすることもあるから、しばらくのあいだは、注意深く見ていなくてはならない。おかしな様子があったら、すぐにここに連れてくるように。

なかなか泣き止まない少年に、医師は言い聞かせて、その薄い肩を叩いた。

――生きた人間がそばについて守っていれば、悪い霊は、近寄って来づらくなるものだ。弟がもう少し大きくなるまでは、お前がしっかり手をひいてやれ。

少年は泣きじゃくりながら、何度もうなずいた。診療所を訪れていた近所の人々は、顔を見合わせて笑い、あるいは涙を浮かべて兄弟を見守り、中には近所中に大声でことの顛末を告げてまわる者までいて、とんだ大騒ぎになった。

その様子を見ながら、ほっとして胸をなで下ろす一方で、同時にこの兄弟を、ひどくうらやんでいる自分に気がついた。

私はかつて、自分の小さな弟を守り切れなかった。

それだから彼のような医師が、私の村にもいてくれたならと、せんのないことを、つい考えてしまう。

医師というのも名ばかりの、怪しげな流れ者が、手妻のような怪しげなわざで貧しい人々から金を巻き上げるところならば、いくらでも見る。あるいは腕があっても、金持ちしか相手にしないような、鼻につく連中は多い。だが彼のように、欲得のからまないところで患者の身を案じる医者に出会うことは、稀なことだった。

なかなか泣き止まない兄弟を呆れ調子で宥めながら、医師がわずかに微笑んでいることに、私は気がついた。

それまで一度も彼が笑っているところを見たことがなかったので、おやと思って見ていると、医師は私の視線に気がついて、すぐに微笑を消し去り、目を伏せた。まるで笑ったことを、恥じてでもいるかのように。

滞在中、私が彼の笑顔を見たのは、そのときのたった一度きりだった。

市がたつのを待つあいだ、医師がよしておけと言ったぼったくりの酒場にも、私はときどき顔を出した。といっても泊めてもらうためにではなく、食事をとるのが目的だった。何から何まで医師の世話になりっぱなしというのも、少しばかり気がひけた。

酒や料理のにおいよりも、菘（たばこ）の甘いにおいのほうが鼻につく、小汚い店だ。小さな町で、顔見知りばかりが毎夜のように集まるものだから、いつ行っても店主も客も、一緒くたになって酔っ払っている。

しかし田舎のこぢんまりした酒場というのは、むしろ都合がよかった。交易のさかんな都市ならば、異国の話などそれほど珍しくもない。くらべてこうした小さな町では、たわいのないような話でさえ、たいてい喜んで聴いてもらえる。近隣諸国の風聞や交易品の相場などを、居合わせ

た人々に話して聴かせれば、ちょっとした食事や酒くらいは、誰かが奢ってくれた。

実を言えば私は酒には弱くて、たいして飲めはしないのだが、木の根から作るとかいう苦くてくせの強い酒を、つきあい程度に舐めながら、実に節操なく様々の話を、手当たりしだいに語って聞かせた。

北はシャガラ連峰の、しじゅう雪に閉ざされた頂と、その氷を南方へ運んで切り売りする、たくましい行商人たちの暮らし立てのことを。南は灼熱の大河からもうもうと吹き上げる蒸気と、その上空を平気な顔をして飛んで行く、翼の強い鳥の話。

遠い異国の風聞を、辺境の人々はなかなか信用しないか、あるいは逆に、むやみやたらと大きさに受け取りがちなものだ。酔っ払いばかりを相手にしていたというのもあって、私の語った話が、おかしい具合に脚色されて、彼らの周囲の人々に広がってゆく様を、私は無責任に楽しんでた。三日前に私が話して聴かせた、北方の海上生活者たちのことが、どのようにして彼らの想像のなかでふくらんだものか、いつのまにか島ほどもある巨大な亀の甲羅で釣りをして暮らす人々ということになっている。

一時が万事そういう調子で、私のほうでも面白がって、あえて誤解を解こうともしなかったから、いつか現地の人々がこの土地へやってくるのがあったら、さぞ迷惑をすることだろう。

そうした話のあいまに、ときおりふっと神妙な表情になって、私の顔をのぞきこむ者があった。たいていは何か言いたげにしながらも、そのまま言葉を飲み込んでしまうのだが、なかには話しかけてくる人間もいた。

ある晩、赤毛の太った男が、やけになれなれしく私の肩を叩いて、笑いかけてきた。

――いや、あんたも変わり者だな。

思わず眉をひそめたのは、男の声音に何か、含みのようなものがあったからだ。人から変わり者と呼ばれること自体には慣れてた。行商というわけでもなく、役人のように公用でもなく、ただふらふらと各地を放浪してまわる人間自体が、そう多いわけでもない。だが彼の笑い方には、もっと違う意味があるように見えた。

私が返事を選びあぐねていると、案の定、男は同情と好奇心の混じり合った、厭な笑い方をして、

――あの陰気な男と二人で顔をつきあわせていて、気が滅入りはしないのか。

そんなふうに出てきた。私はつとめて嫌悪感を顔に出さないように、

――別に、そんなことはないが。

そう曖昧に逃げたのだが、その返事を聞いた男が、何も言わずともよく分かっているというように、勝手に合点して何度もうなずくものだから、

――患者に慕われている。よい医師だと思う。

ついそんなふうで、言わずもがなの言葉を足した。その声が、思った以上に強い語調になっていることに気がついて、私は心のうちで、少しばかり焦った。放浪の身の上で、土地の人間と諍いを起こしていいことは何もない。

だが幸いにもと言うべきか、男は怒り出しはしなかった。ただ、いささか鼻白んだような顔をして、

——そうかい。

それだけ言うと、さっさと離れて別のテーブルに行ってしまった。

その晩の帰り道、霧に巻かれた。地形のせい、この町では毎晩のように霧が出る。その夜は一段と霧の密度が高く、自分の足元でさえ、かすんで見えるような始末だった。

すぐ道の脇には民家が建ち並び、人々の暮らしが営まれているはずだというのに、霧が音を吸うのか、あたりはしんと静まりかえって、自分自身の足音でさえやけに遠く聞こえる。しばしば人の誰もいない廃墟の町を歩いているかのような錯覚を覚えた。そうかと思えば、道の向かい側から歩いてきた人物と、あわやぶつかりそうになったりする。

ぶつかればまだしも生身の人とわかるが、思いがけずすれ違ったりすると、その気配もひどく朦朧で不確かなものに思えて、うそ寒いような心持ちがした。

死者の沼の話をも初めて耳に挟んだとき、ずいぶんと身近な冥界への入り口もあったものだと呆れたが、あとにして思えばそれもそのはずで、このあたりの人々にとって、死者との距離は、そもそもひどく近いしかなかった。

注意深く聴いていけば、ここらの人々はとうの昔に死んだ人間について語る時にも、まるでいまでもすぐ傍にいるかのように話すのだった。それというのも、このあたりの言い伝えによれば、死者の魂のゆく世界と自分たちが生きているこの世界は、同じ場所に重なり合って存在しているのだという。普段は私たちの目に死者は見え、死者の目にも私たちの姿は見えないが、こんな霧の夜には両者の境が不確かになるのだと。

そんな話を聞かされていたからか、つい早足になった。路地の両脇に立ち並ぶ家々に、石造りのものはめったになく、ほとんどが木の骨組みと、土を固めた壁でできた建物だ。柱はこの湿気にやられて、ところどころ腐りかけ、じきに崩れそうに見えるものさえある。砂漠のように干し煉瓦が作れるわけでもなく、いい石の採れる場所も近くにはないものだから、人々は腐りやすいのを承知で木を材に使うのだ。不便をおして、手入れをしながらそこに暮らし、いよいよどうにもならなくなれば建て直す。作り直すだけの余裕のない者は、いつ崩れるともしれない家にそのまま暮らしている。

そういう家の脇を通りかかると、なかでは普通に誰かが暮らしているはずだと頭では思う一方で、それこそ死者の街に彷徨いこんだのではないかなどと、益体もない考えが頭を掠めた。

急ぎ足で診療所に戻ると、とうに眠っているかと思った医師は、起きてぼんやりと窓の外を見上げていた。分厚い霧に遮られて、星一つ見えない空を。

ふっと夢から現に帰ってきたように、医師は私のほうを振り向いて、

——酒場に、ヨクルは来ていただけるか。

そんなことを訊いてきた。

——赤毛の、小太りの男だ。左の顎に傷跡のある。

その特徴はまさに、あの厭な笑い方をした男のものだった。

――ああ、来ていた。ずいぶんと飲んでいたようだったが。

――顔色はどうだった。顔や首に、おかしい斑点が出てはいなかったか。

その言葉で、あの男も彼の患者なのだとわかった。そしてしばらくこの診療所から、足が遠のいているらしいということも。

――さて、そういうことはなかったようだが。

――そうか。

医師はそれ以上の説明をしなかったが、それでもあの男の体を心配しているらしいことはくらいはわかった。赤毛の男が彼について語った言葉の調子と、その相手の身を案じる目の前の医師との温度差に、私はこの孤独な男のことを、少しばかり気の毒に思った。

――あんたも、酒でも飲めば、ぐっすり眠れるのではないか。

思わずそう言ったのは、彼の奇妙な夢歩きが、いささか気がかりだったためだ。酒の力を借りて酔いつぶれば、夢うつつに寝台から抜け出すこともできぬほど、深く眠れるのではないかと考えたのだ。だが医師は首を振って、ただひと言、

――酒は、飲めないのだ。

そう答えた。静かな口調だったが、そこにはそれ以上の追及を拒むような響きがあった。

彼の口数の少ないのは最初からのことだったのだし、それまでは沈黙を気まずく思うこともなかったというのに、このときはやけに息苦しく感じられて、私は無理に話題を変えた。

――私も酒には、あまり強くないのだが、酒といえば、ここからはずっと北東の、高原地帯の部族に世話になったことがあって……

取り繕うような話題の転換は、我ながら白々しかったが、医師は特に気を悪くしたようすもなく、耳を傾ける気配を見せた。

――そこの連中は、とにかく毎日、浴びるように酒を飲むんだ。それは何も、彼らが怠け者だからというのではなくて、彼らなりの信仰というか、信条のようなものがあることらしいのだが。

話しながら、当時の記憶が蘇ってきて、私は苦笑した。そのあたりが非常に寒い地方で、酒の力を借りて体を温めなくてはならないというのもあるのだろうが、それにしても、ほんの子供まで酒を飲むのだから、やはり変わった連中だった。

――彼らが言うには、酒に酔ったときに見せる顔こそが、その人間の本性だというんだな。それだから、酒を飲みたがらない人間は、信用できないのだと。

そう言われれば、飲まないわけにもいかない。そのとき私はその部族のもとに、半月ばかりも滞在したのだが、その間、毎晩のように宴会が繰り広げられた。異国の客を歓迎する気風があるのは、こちらの身上からすれば有難いことではあったのだが、

――もう呑めない、これ以上は無理だといくら言っても、とにかく強引に呑まされる。しまいには気分が悪くなって吐いても、皆、げらげら笑っているんだ。あのあたりにはどうやら、酒に弱い人間というのがいないようだから、私の情けないようすが、可笑しかったのだろう。

そんな話をしたのも場つなぎというか、単なる軽口のつもりだったのだが、いつからか医師が

やけに真剣な顔をして、じっとこちらを見つめていることに気がついて、私はつづく言葉を飲み込んだ。

居心地の悪い沈黙のあとに、やがて医師はふと目を伏せて、

――そうか。酒に暴かれるのが、人の本性か。

そう呟いた。そこには何か、妙に真剣な響きがあって、軽口のもりだった私は妙に慌てた。

――さて、どうかな。一理あるといえば、あるような気もするが、しかしもっと西の低地にゆけば、そこでは酒は、悪霊を体に呼び込む霊媒だといって、忌み嫌われている。

だが続く私の言葉を、医師は、ろくに聴いていないようだった。私が会話の接ぎ穂に困っていると、彼は唐突にこちらを振り返って、

――死者の沼に、行ってきたと言っていたが。

そんな話を切り出してきた。急な話題の変化に、今度はこちらが目を白黒させる番だった。

――ああ、そうだ。そこで虫に食われて、ここに運び込まれたんだ。

――お前には、聞こえたのか。

重ねられた質問にとっさに答えられなかったのは、何を訊かれているのか、すぐに理解できなかったからだ。

一拍遅れて、ようやく察した。死者の声は聞いたのかと、彼はそう訊ねているのだ。

――いや、残念ながら。

――そうか。

医師はそれだけ言って、目を伏せた。

翌日の昼過ぎ、痩せた若い男がひとり、診療所を訪ねてきた。見るからに足取りがおぼつかなかったその青年は、医師に症状を聞かれると、ぼそぼそと消え入りそうな声で、体の不調を訴えはじめた。

頭が重く、胸が苦しいのだというようなことを、青年はくぐもった声で繰り返したのだが、その声はどうにも投げやりな調子で、医師に助けを求めているというよりも、どこか空中に言葉を投げつけているかのような響きがあった。

その日、医師は患者の話聞くだけ聞いて、何の薬も処方しなかった。ただ青年の脈を取って、喉の奥をのぞき込んだほかには、いくつかの質問をしただけだった。青年の帰り際、医師は相手に向かって、呪いが通り過ぎるまで、ただ耐えるしかないというようなことを言った。

だが患者はどういうわけだか、そんな言葉でも、最後にはいくらか気が軽くなったような顔をして、大人しく帰って行った。

青年が出て行っていつか経ってから、とうとう我慢できなくなって、私は医師に話しかけた。

――さっきの男は、あれでよかったのか。

私の声には、非難の色が混じっていただろうか。医師はじっと私の目を見つめ返して、

――治る気のない者を、治せるわざは、どこにもない。

はっきりと、そう言った。

――そういうものか。

――そういうものだ。

納得がいかないまま首をかしげた私に、医師は浅くうなずいた。それから椅子に掛けると、窓の外をぼんやりと見上げて、

――そういうものなのだ。

もう一度、静かにくりかえした。

その晩、恐ろしげなうなり声がして、私は夜更けに飛び起きた。

声は、どうやら壁越しに聞こえてきたようだった。こんな小さな町で、押し入り強盗でもあるまいがと思いながら、医師の眠る寝室に向かった。足を踏み入れると、妙なもので、診療のために使っている部屋よりも、ここのほうがいっそう薬のにおいが鼻についた。

寝台で小さく丸まっている背中を、何度か叩いてみても、医師はなかなか目覚めなかった。何度も激しく肩を揺さぶって、耳元で大声を出して呼びかけると、ようやく彼は目を開いた。

触れた背中を、汗でぐっしょりと濡れていた。細い月明かりが窓の隙間からさすばかりの、薄暗い部屋の中で、彼が激しく瞬きをするたびに、白目の部分だけが爛々と光った。

――ずいぶんひどくうなされていた。悪い夢でも見たのか。

ほかにどう声のかけようもなく、そう訊ねると、医師はしばらく呆然と瞬きを繰り返していたが、

――夢？ ああ、そうだ。夢だ。

まるで自分に言い聞かせるかのような口調で、そう言った。

――悪い夢は、人に話せば、逆しまになるというが。

私がためらいがちに水を向けると、医師はいっとき黙っていたが、やがて、まだ半ば悪夢のなかにいるかのような声音で、

――酒を、飲んでいたので。

そう囁いた。

飲めないのではなかったのかと、よほど言いそうになったのだが、ささやかな嘘をあげつらうかのように気がひけて、私はとっさに言葉をすり替えた。

――夢の中で？

――そう。夢の中で。

夢の中で、さらに眠っているなど、おかしい話だろうと医師は言って、それから低い声で続けた。酒を飲んで、ひっくりかえって、呑気に鼾なぞ掻いていたのだと。たしかに眠ってはいるのだが、なぜだか意識はあって、自分の鼾を聞いている。

――すぐ近くで、獣のうなり声がした。それで、夢の中で、飛び起きたのだ。そうしたら、妻が……

――奥さん？ あんた、奥さんがいたのか。

――ああ、そうだ……

そこでふっと口をつぐんで、医師は何度か目をしばたいた。その瞼を、汗がつつと伝うのが見えた。

医師は悪夢を振り飛ばそうとするように、何度も首を振って、

――どうやら、寝ぼけていたようだ。起こして済まなかった。

それだけを言うと、また背中を丸めて、毛布にくるまってしまった。

話の途中で取り残された私は、不安の切れ端に首根っこを掴まれたような気分のまま、しばらくそこに突っ立っていた。だが、わざわざ医師をふたたび叩き起こして続きを話させるというわけにもいかず、結局はおとなしく客間に戻って、自分も寝直そうとした。

だが結局は寝付かれず、寝台の中で寝返りを繰り返しながら、ひと晩を明かすことになった。

ものの腐りやすい湿地帯だからか、この町で出される食べ物には、保存のきくよう、手を加えられたものが多かった。砂漠地帯から交易で手に入れるらしい塩は、このあたりでは高価なもので、そのためか塩漬けよりも、醸して食べるもののほうが多かった。これには非常に閉口した。とにかくにおいがきついのだ。慣れれば味わい深いと思えないこともなかったが、とにかく初めのうちは何を食べても妙な味しかしないので、腐っているとしか思えず、いつ自分が腹を下すかと、戦々恐々としていた。

その夜も酒場で、酸っぱいような匂いのする山草の漬け物をつついていた。珍しく客の少ない夜だった。いつもだったら常連客らしい近所の面々が、誰かしら顔を出して騒がしくしているのに、この日にはどういうわけだか、なかなか人がやって来ない。あてが外れはしたものの、小銭も残っていないというわけでもなかったから、値の張らない料理を少しばかり頼んで、酒場の主人相手に話をしていた。

相手が猟師でもあることだから、遠い異国の、珍しい猟のやりかたなどを話せば喜ばれるだろうと思って、中央の草原地帯で、巨大な犀を狩る部族の話だの、北部の深い針葉樹の森で、四ツ脚鳥を生け捕りにして飼い慣らす連中の話だのを、いっとき脈絡もなく語っていたのだが、ふと話題の途切れた拍子に店主は、

――この頃、奴の様子はどうか。

そんなふうに話を切り出してきた。奴というのが医師のことを指しているというのは、聞かずともわかったが、それにしても、意図の汲めない質問だった。

――どうだとは、やけに漠然とした訊ねごとだな。

そんなふうに私が混ぜっ返すと、店主は曖昧に首を振って、

――何もないのなら、それでいいんだ。

そんなふうにごまかした。

私は言葉に迷った。何も変わったことはないと言えば嘘になってしまうのかもしれないが、医師のおかしな夢歩きやうなされていた夜のことを、勝手に話してよいものか、とっさに判断をつけかねたのは、彼が異国の人間だということを、どうしても思い出してしまうからだった。

長くこの町に住んで、人々に尊敬されているのだとしても、彼は異邦人だ。遠い土地で生まれ育った人間に対して人々が見せる、心の深いところでの拒絶というものを、けして軽く見てはならない。自分が放浪の身の上だからこそ、そのことは身に染みてわかっているつもりだった。不用意な私の言葉のせいで、医師が孤立することにでもなれば、恩を仇で返すことになる。

私のためらいをどう受け取ったのか、店主は気まずげに首を掻いて、言い訳をしてきた。

――いや、誰か家族が傍にいるのなら安心なのだが。いまはそら、あいつも独りだろう。

その言葉がひっかかったのは、寝ぼけた医師の言葉が、まだ記憶に新しかったからだ。

――いまはということは、以前は違っていたのか。

何気ないふうを装ってそう聞き返すと、店主はああとかまあとか、あいまいに相づちを打って、気まずげに鼻を掻いた。

最初のうちこそ歯切れ悪く、どこまで話したのかと迷っていたようすだったが、酒が入っていることもあってか、やがて店主は、こちらが訊いてもいないことまで話し出した。

かつて医師の妻だったという女は、ずいぶん前に一悶着あって、あの家を出て行ってしまったのだという。女の父親、医師にとっては義父にあたる人物も、あの診療所で一緒に暮らしていたのだが、そちらはもっと前に亡くなっている。夫婦の間に子はなかったから、医師は以来、長いことひとりであの家で暮らしているのだそうだ。

もともとは流れ者だった医師を、その義父という人物が気に入って、入り婿のような形で迎えたということらしい。このあたりでは一般的に、夫は生家に暮らしたままで妻の家に通うことが

多いから、珍しい形には違いなかった。ほかの地方から流れてきた医師に、住む家がなかったからこそのことだろう。

その話を聞いて、私は医師のことを気の毒に思った。彼の出身である砂漠地方では、女のほうが男のもとに嫁ぐのだし、妻は厳しく貞節を求められ、夫に従順に尽くすことを望まれる。そういう土地で生まれ育った男が、入り婿として、義父や妻に頭の上がない状況で暮らすというのは、何かと気苦労の多いことだっただろう。

私の同情になど気づかない様子で、店主は遠い目をして、

――ずいぶん、いい女だった。アダーシャに気のある男は、山ほどいたが.....

そこまで言って、不意に、言葉を詰まらせた。それから何かをごまかすように、咳払いをした。

もしかするとこの男自身も、医師の妻に気があったのかもしれないなど、そんなことを思いながら、私は口を挟みそびれて、おかしな味の漬け物をかじった。

どうにも話の弾まない、陰気な夜だった。いつも酔っ払いたちが騒々しく騒いでいるのと同じ店内なだけに、籠もったような沈黙が気まずく、落ち着かない。

いつとき黙って酒をなめていた店主は、手元をのぞき込んだまま、コップに話しかけてもするかのように、ぼそりと呟いた。

――あいつは、いいエトウキになったな。

その口調に何か含みを感じて、私は眉を上げた。

――昔は、違った？

――そうだな。来たばかりのときは.....

言いよどんで、店主は頭を搔きながら、カウンターの奥に引っ込んだ。それから新しいコップをふたつ持ってきて、自分と私の前に置くと、酒を注いだ。さっきまで彼が舐めていた、いつもの安酒とは違う、果物から作るという赤い酒だった。自分用にとっておいたのだろう。

――いや、最初から、腕はよかったんだ。人間だって、悪くはなかった。あれで、酒癖さえ悪くなけりゃ.....

その言葉は意外なものではあったが、同時に、腑に落ちるような気もした。酒の失敗で問題を起こして、それから飲まなくなったのだとすれば、先日からつじつまのあわない医師の言動も、納得がいく。出て行った彼の妻というのも、何か、そのあたりに事情があるのだろう。

店主は瓶を傾けながら、やはりコップの底に言葉を落とし込むかのように、呟いた。

――ずっと、居てくれりゃいいんだが。

その言葉が意外で、私は眉を上げた。医師は彼の貧しい患者たちに責任を感じているように、私の目には見えていた。

――彼は、この町を出て行くつもりなのか。

――いや.....

あいまいに否定して、店主は目を逸らした。何かを言いかけて迷うような間があって、しかし結局は、酒と一緒に言葉を飲みくだしてしまふ。コップが空になるころになって、店主は大きな溜め息を落とし、

—今日はだめだな、誰も来やしねえ。まだ早い、店じまいさせてもらう。

そう言うなり、さっさと立ち上がって、酒瓶と食器を片付け始めた。私が面食らいながらも、とにかく料理と酒の代金を置こうとすると、店主は首を振って、

—今日はいい。話の代金だ。

たいした話もしていないのに、そんなことを言った。そして有無を言わず、私を追い出した。

あれはいったい、何に対する代金だったのか。そんなことをぼんやりと考えながら、診療所への道に戻った。今夜、話したことの内容を、医師には伝えてくれるなどという意味だろうか。

秘密。それが私がこの土地に対して漠然と抱いた印象だった。誰もがいつも、何かの言葉を飲み込んでいる。

もちろんこの町に限らずとも、人は隠し事をする生き物だが、それがとりわけ鼻につくように感じるのは、夜ごとに町を覆う、この霧のためだろうか。

まだ夜も早かったが、すでに霧は街路の向こうから、町を押しつつむようにひろがりはじめていた。東の空を振り返れば、満月から少し欠けた月が、朦にかすんで燐光を放っている。

不意に風が吹いて、霞が渦巻く。この重く湿った夜気のせいで、食べ物には黴が生え、品物は腐り、人の怪我はぐずぐずといつまでも治らない。

この夜霧が、人の心に抱える秘密をあいまいに包み隠してしまうのではないかという、さっきの益体もない思いつきが、いつまでも去らずに思考の隅をぐるぐると回っている。

自分の足取りが、わけもなく重いことには気がついていて、店主から聞いた話の断片が、胸の中で浮いたり沈んだりを繰り返していた。

とりとめのない考えが、頭の隅にひらめいてはかき消え、やがてひとつの疑問が残った。

美しかったという医師の妻は、どこに行ったのだろうか？

診療所に戻ったとき、医師はどこかぼんやりとした表情で、窓の外を見ていた。話しかければ返事はするのだが、どこかしら反応が鈍いというか、心ここにあらずという風情で、あいまいな相槌ばかりが返ってくる。

そこで、何か悩み事でもあるのかと、訊けばよかったのだ。そうしなかったのは、酒場の店主との会話が、胸のどこかに引っかかっていたからだ。

もっと言えば、私は怖かったのだ。いずれ遠からず立ち去る、無責任な旅人の身でありながら、土地の人間の事情に深入りすることへの、引け目もあった。それは私の臆病さでもあり、保身でもあった。

その臆病さが、私にとっての分かれ道になった。

その晩、奇妙な夢を見た。

私は酒を飲んでひっくり返り、鼾をかいて眠っている。その同じ部屋の、おそらくは反対側の隅で、獣の激しい息づかいが響いている。起きなければ、と夢の中で私は思う。だが体は眠っている。手足が自分の意思に従って動かない。

獣の声に、低く掠れた苦悶の声が重なる。夢うつつの、まだ半ば酔いのなかにある朦朧とした意識のすみで、しかし、耳だけがやけに鮮明に物音を聴いている。自分の立てる鼾。獣の息づかい。くぐもった、低い、うめき声。

水でも浴びせかけられたように、いきなり目が覚めた。

夢の中で目覚めたのではなく、ほんとうの覚醒だった。自分がなぜ目を覚ましたのかが判らずに、何度か目をしばたいて、それから、なぜあんな夢を見たのだろうと思った。まるで数日前に医師から聞いた話が、私の夢に、そっくりそのまま忍び込んできたかのようにだった。

本当に水でも浴びたのかというくらい、ひどい寝汗を掻いていた。夢の中で私の胸を占めていたのは、不安や恐怖というような、受け身の感情ではなかった。そこにあったのは、怒りだった。苛立ちというような生ぬるいものではない、憤怒、といってもいいような、激しい衝動。その激情の残滓が、まだ胸に居座っていた。

それはおかしな話だった。たったあれきりの夢の中で、私は何に怒っていたというのか。

深呼吸をして、掌で顔の汗をぬぐい、それからようやく気がついた。家の中が、静まりかえっている。

いつもは壁越しにかすかに聞こえている医師の寝息が、まったく耳に届かない。

不安に駆られて寝台を抜け出したのは、例の奇妙な夢歩きのことが、頭の隅にあったからだ。

予感当たっていた。医師の寝室をのぞき込むと、そこはもぬけの殻だった。

とっさに玄関から飛び出すと、あたりは一面、霧に飲まれて真っ白だった。

足を踏み出すのに勇気がいるほど、視界がなかった。

霧に閉ざされて、静まりかえった町の中を、壁に手をつきながら歩きだしたときには、方角も何も、ほとんど当てずっぽうだった。危なっかしい足取りでしばらく歩いてから、そうだ、あの日の泥だと、遅れて思いついた。前に医師が夢歩きをした晩、雨も降っていなかったというのに、彼の足は泥だらけだった。

医師は、町を出て、沼地に行っているのではないか。

ただひとこと沼地といっても、町の周囲をとりまく広大な湿地帯の、どこだかわかるわけもない。だが歩くうちに、医師と交わした言葉が思い出された。

声は、聞こえたのか。医師は私にそう訊いた。

死者の沼だ。

道の脇に並ぶ、古びた家々の壁に手をつきながら、危なっかしい足取りで歩くあいだ、ときおり強い風が吹き付けて、道を遮る霧を薄れさせた。

払われても払われても、霧はまた際限もなく新しく流れ込んでくるのだが、それでもときおり視界が開けるだけでも、いくらかは歩きよかった。私はそのたびに、道の先に人影がよぎりはしないかと目をこらし、耳を澄ませた。

鄙びた小さな町のことで、真夜中に外を出歩く人間などいない。誰の気配も感じられないまま歩き続けて、しんと静まりかえった田舎町の、ささやかな目抜き通りを抜け、やがて人家も絶えた。

そこで、引き返そうかとも思ったのだ。たとえ一度は通ったことのある道のりとはいえ、不慣れな沼地を、それも霧の晩に、ひとりで行こうというのは正気の沙汰ではなかった。

だがそのときになって、風が吹いたのだ。

びょうびょうと音を鳴らして吹きつける、強い風だった。霧は見る間に流れ、月明かりの照らす道の先に、私は人影を見た。

距離はかなり離れており、実を言えば、それが間違いなく医師であるというほどの確信が持てたわけでもなかった。だが、彼のほかにいったい誰が、こんなところを夜分に一人歩きなどするだろう？ 夢歩きをする病人でもなければ？

だが、私が追いつくよりもずっと早く、霧はふたたびあたりを満たし、人影は再びおぼろげに霞んだ。私は慌てて声を張り上げた。

――おい。

返事はなかった。自分の声が、ただ無為に霧に吸い込まれて行く。

ためらったのは、短い間のことだ。このまま何も気がつかなかったことにして、診療所の客間に戻れば、きっと後悔するという予感があった。

町を出てたいして行かないうちに、足元は泥濘みはじめた。あの陽気な案内人から教わった目印を、霧の切れ間にさぐりながらの道行きだ。足取りは遅々として進まなかった。夢歩きのおぼつかない足取りと、どちらが早いだろうかということ、歩きながら頭の隅で、ずっと考えていた。

躓き、惑い、足を止めるたびに、声を張り上げた。

――おい。そこにいるのか。

何度呼びかけても、返ってくる答えはなかった。だが、諦めそうになる頃に、たびたび先に行く足音らしきものが、耳をかすめる。草が掻き分けられ、水が跳ねる。羽を休めていた鳥たちが、慌てて飛び立ってゆく。

道々、私は何度となく転倒した。とっさに履いてきた靴は、小枝を踏み抜いて、すでに穴が空いていた。生ぬるい泥が足指のあいだに入り込む。蹴った葦草が跳ねて、手足を打つ。

あの陽気な案内人と連れだって歩くあいだには、足元こそ悪いものの、風光明媚な場所だと感じていた。その同じ湿地が、夜霧にまかれながらひとりで歩いていると、まったく違う場所としか思えない。

死者の沼の伝承が、頭の隅をちらついていた。一方では、生者の暮らす町と死者の住まう世界が、同じ場所に重なって存在しているといいながら、もう一方では、死したる人々と言葉を交わしたいのならばあの沼へ行けと、指さして言う。奇妙なことではないか？ 異界と現世が重な

っているというのなら、死者の声を聞くのは何もこんな沼地でなくとも、町はずれの辻だろうと、広場の隅だろうと、同じことだろうに。

あの沼だけが特別である理由は、何なのか。

美しかったという医師の妻は、彼の元を去って、いったいどこに行ったのか。

草いきれと、泥の甘い匂いの中を、どれほど歩いただろうか。死者の沼のほとりに到る、最後の目印を確かめながら、昼間でさえ何度も泥濘みに足を取られたあの道を、ろくに視界もきかない中で歩きとおしてきたのだということに、いまさらのようにぞっとした。泥沼に足を取られた数日前の記憶が、背筋を粟立たせた。

茂みを掻き分け、寒気を振り払うように身震いした、ちょうどそのときだった。ひととき強い風が吹いて、霧を吹き払った。

死者の沼は、すぐ目と鼻の先だった。昼には空を映しこんでいた沼は、いまは黒々とした水面を揺らし、風に乱されては、そこに映り込んだ月をばらばらに引き千切っている。水上に咲いた白い花が、闇の中で、ほの白く浮かび上がっていた。

その沼のほとりに、医師は立ち尽くしていた。

目を開けたままで眠っているかのような、茫洋とした表情で、彼は突っ立っていた。小柄な体躯が月明かりを受けて、足元に濃い影を落としている。

――こんなところで、何をしているんだ。

呼びかけても、医師は私に気がつかないようだった。

私は彼のそばに、歩み寄ろうとした。その手を引いて、診療所へ連れ帰るつもりで。

気がせいたのがいけなかった。蔓草の上を踏み外した足が、ぬるりとした泥に飲まれた。

水面を蹴立てて転げ、とっさに手を突きながら、慌てて振り仰ぐと、月明かりに照らされた医師の横顔が見えた。

先ほどまで茫洋としていたその目が、いまは、大きく見開かれていた。

その口から、言葉にならないうめき声がこぼれるのを、私は聞いた。悲鳴というにはあまりに弱々しく鈍い、低い声。驚いた鳥たちが葦草のあいだから飛び立って、夜の沼地を騒がせた。

風がうなりを上げている。頭上の雲が流れ、月明かりがひととき鮮やかに地上を照らす。

それまでただ苦しげに唸るばかりだった医師の声が、あるとき急に、形を取った。

――アダーシャ。

医師は何もない水面に向かって、繰り返し、その名を呼んだ。

それは、彼のもとを去ったという、妻の名前ではなかっただろうか。

泥濘から這い出ようと足掻きながら、ほんの数日前、死者の声は聞こえたかかと、思いがけず真剣な声音で訊いてきた医師の表情が、私の脳裏をよぎった。

――許してくれ、アダーシャ。

医師は身を折るようにして苦悶し、同じ言葉を、繰り返し叫んでいる。

――許してくれ。

そのとき私は、奇妙なものを見た。

死者の沼の、水面に、白い霧が凝っていた。

それだけならば、ただ風の悪戯と思っただけだっただろう。だがそれは一瞬、人めいた形に一もつというならば、女の立ち姿のように見えたのだった。

まさか本当に、その場に生身の女がいたわけではない。水面に立ち尽くせる人間がいるはずもない。第一それは、目を擦ればもうわからなくなるような、不確かな影に過ぎなかったのだ。

だが医師は、その靄のほうに手を伸ばし、よろめくように、足を踏み出した。

はっとして、私はいまひとたび、彼の名を呼んだ。ほとんど悲鳴のような調子だった。それでようやく、医師は、私の存在に気がついたようだった。夢から覚めたような顔で、彼は振り返りかけて――

がくと、その体が傾いた。

鈍く重い、水音が響いた。水面が乱れ、葦草が騒々しく鳴る。慌てて駆け寄ろうとした、まさにそのとき、やっと抜け出しかけたと思った泥濘に、またしても足を取られた。

再びしぶきを上げて、私は泥のなかに突っ伏した。体を支えようとして、その手が生ぬるい泥に沈む。丈高く繁った葦草に遮られて、医師の姿が見えない。

ぞっとした。まさに数日前の再現だった。焦れば焦るだけ、手足が沈んでゆく。

左足を飲み込んだ泥の抵抗は重く、まるで何者かの手に、足首を引っ張られているかのようだった。とっさに掴んだ葦草は、思う以上に葉先が鋭く、手のひらが切れるのがわかった。

もがきながら、繰り返し医師の名前を呼んだが、返事はなかった。彼はもう、叫んではいなかった。夜の沼地は静寂に包まれ、ただ自分が立てる鈍い水音と、風に草の鳴る音だけが、そこに響いていた。

ようやく足がかりを見つけて体を引き上げ、どうにか立ち上がったときには、もう何もかもが終わっていた。

医師がいたという痕跡はどこにもなく、ただかすかに、沼地を覆う水草が揺れ、水面が波立っていた。

――なぜだ。

答えがないのを承知で、叫んでいた。

溺れる人間がそうするような、空気を求めてもがく気配は、少しもなかった。

息を潜めていた虫たちが、再び騒々しく鳴き出す。沼のどこか向こう側で、ぷくぷくと泡の湧く音がする。

水面に浮かび上がる白い花が、甘い芳香を立てていた。

小さな町の隅々までが、慨嘆に塗りつぶされているように、最初のうちには感じられた。

だが、呆然と野辺送りの火を見ているうちに、私はあることに気がついた。いつかの小さな兄弟や、診療所に来ていた患者の多くが、声を上げて泣き、医師の突然の死を激しく悲しんでいるその一方で、彼のことをよく知っている者ほど、深い嘆きの中にどこか来たるべきときがきたというような、諦めの色が混じっている。酒場の店主も、近所のおかみさん連中も、あの陽気な案内人もそうだった。

不慮の事故で知己を失ったにしては、それは、いささか奇妙な反応だった。状況を受け容れられずに呆然とするのでもなく、嘆きを怒りにすり替えて激高するのでもなかった。彼らはただ、落胆していた。

昼日中であるにも関わらず、空には薄雲がかかり、太陽が淡く煙っていた。弔いには似合いすぎる天気だった。

ここらでは、弔いに来た人々が薪を一本ずつ積んでゆく風習があるそうで、広場に上がった炎は、彼の人徳を忍ばせる、盛大なものだった。炎は轟々と燃えさかり、広場から飛んだ火の粉が、近所の家に燃え移る心配をしなくてはならないほどだったが、それでも遺体のない野辺送りの炎は、どこか空疎に見えた。

人々のうち沈んだまなざしを見ているうちに、私の中で何かがつながったような気がした。

自らの生家であったはずの家から姿を消して、どこかに行ってしまった彼の妻――美しかったという女。

酔っ払って鼾をかいていた医師と、部屋の隅から響く、低い、獣の声。彼の語ったあの夢が、もし、現実にあったことなのだとしたら。

死者の沼で見た、朧な影を思い出したとたん、背筋が総毛立った。

あんなものは、ただ夜霧が風に巻かれて吹き溜まっていただけだ。月明かりの見せた悪戯だと、私は自分に言いきかせた。

許してくれと、沼に向かって妻の名を叫んだ医師の、青ざめた横顔が、目に焼き付いて離れない。

医師の妻の亡霊が、彼を呼んでいたのだとは、思いたくなかった。死者があの男を、冷たい沼の底に引きずりこんだのだとは。

――あなたは、知っていたのか。

居合わせた酒場の店主にそう問いかけると、彼は怪訝そうな顔をするでもなく、黙って目を伏せた。それから随分と長い沈黙のあとに、

――残念だ。

それだけをつぶやいて、背を向け、広場から立ち去った。

その小さく丸まった後ろ姿を見送っているうちに、それまで町の人々に漠然と感じていた不審と苛立ちが、いちどきに裏返って、私自身を鋭く突き刺すのを感じた。

知っていて何もしなかったのかなどとって、彼らを責める資格が、私にあるはずがなかった。通りすがりにすぎない自分が、土地の人の事情に深入りするものではないなどという言い訳を盾に、とうとう何もしなかった私に。

一度だけ見た医師の微笑が、脳裏に蘇った。あのとき彼は、ほんのわずかに微笑むことさえ、まるで罪深いことであるかのように、すぐに目を伏せた。

医師の語った言葉が、きれぎれに耳に蘇る。助かる気のない者を救うことは誰にもできない。死者の声は聞こえたのか。

酒が暴くのが、人の本性か。

彼を夜の沼へと追いやった、その最後の一押しが、あのときの私の不用意な言葉ではなかつ

たと、誰に言えるだろう？

私はあのとき、否定するべきだったのだ。人々の病を無償で治し、己を厭う患者にさえ責任を感じていた、あの愛想のない男に向かって、言ってみせるべきだった。何が本性で何が上辺だなどと、そんなふうに、安易に割り切れるようなものではないと。人はそんなに単純な生きものではないだろうと。

いまさら悔いても遅い。

それから数日をかけて、診療所の片付けを手伝った。

すでに身寄りのなかった彼の家は、空き家になった。わずかばかりの家財や、たくわえられていた薬のたぐいは、どういう取り決めがあったのか知らないが、近所の人々にうまい具合に分配されたようだった。誰かが言い争って死者の安息を乱すこともなく、哀しみに満ちた沈黙のうちに、作業は行われた。

治療費を払う相手がいなくなってしまった以上、市が立つのを待つ意味もなくなった。がらんとした診療所を後にして、私は町を立ち去ることにした。

出立の朝、街道にまっすぐ向かわずに、回り道をして、死者の沼をみたび訪れることにした。

あらためてひとりで向かえば、猟師たちの目印はいかにも頼りなく風景に紛れて、あの霧の夜、よくも迷わずに沼までたどり着けたものだと、自分で呆れるほどだった。

月明かりの下で見たときには、闇の中にぼうっと浮かび上がって、この世のものとも思えなかった白い花の群れは、昼間に見れば、どこにでもある当たり前の浮き草にすぎなかった。

静まりかえる水面に向かって、二度、医師の名前を呼んだ。

応える声はなかった。

死者の沼

<http://p.booklog.jp/book/92971>

著者：朝陽遥

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hal00/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/92971>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/92971>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ